



十一 善きにしろ、悪きにしろ、再会にて

「おじいちゃん。石に水をやったらいいの？」

小学生の孫の翼がジョロに水を注いでいる。これが翼の日課だ。坂本はそれに対してお小遣いをあげている。宮本が石になって以来、坂本は毎日、水をやり続け、結婚して、子どもが出来てからは、水遣りは子どもの仕事となり、今は、その仕事が孫に引き継がれている。そう、石への水遣りが、今では宮本家の伝統行事となっている。少し、大袈裟か。

「ああ。頼むよ」

坂本は縁側に座って、空を見上げる。石の形の雲が流れて行く。その石が風の影響なのか、人間の形に変化して、武士の姿に見えた。

「まさか」

坂本は目をこする。最近、歳のせいか、物がはっきりと見えない。ぼやけて見える。医師からは、白内障の手術を勧められている。だが、今さら手術だなんてめんどくさいと思い、ほおっておいている。でも、このように見えるのだったら、やはり、手術しようかなと思い直した。翼は庭に置いてある石に近づく。

「おじいちゃんの変なの。朝顔やひまわりなんか、植物に水をやるならわかるけど、石に水をやっても成長しないのに。まあいいか。お小遣いがもらえるなら」

翼がジョロを傾げる。石は大きな石、中くらいの石、小さい石の三段重ねだ。親亀、子亀、孫亀だ。その横にも同じような石が三段重なっている。二つの石にシャワーを掛ける。その時、石から白い水蒸気が出てきた。

「おじいちゃん。大変だ。石が火事だよ。煙が出ているよ」

「石が燃えるわけではないだろう。よいこらしよ」

坂本は年齢が八十歳になった。一つの行動にも「よいこらしよ」の掛け声が必要だ。だが、翼が叫んだので、仕方なく庭に降りてきた。

「ほら。おじいちゃん。燃えているだろう」

翼は煙が出ている辺りを指差す。

「ま・さ・か」

宮本は煙を凝視した。もう一度目を凝らす。ぼやけてなんかいない。確かに白い煙が出ている。煙は火事ではなく、水蒸気だった。その煙はやがて消えて行き、一陣の風が吹くと人影が現れた。ざんばら髪で、甲冑を身につけたものの、体中に矢が刺さった落武者だった。そう、今から何十年前だったろう。出会った時のままだ。坂本は弱った脚の筋肉でシーソーのようによろめきながら、落武者に近づいた。ただし、孫の翼は、目を丸くするだけで、ぽかんと口を開けたままだ。その口にニンジンを咥えさせられたとしても気がつかないぐらいの大きな口だった。

「久しぶりでござる。坂本殿。また、世の中を一緒に洗濯しようでござる」と宮本は昔のままの顔で笑った。ざんばら髪が風に揺れた。

その時。宮本が立っている場所から同じような白い煙が噴き出た。

「何か、ぼくはつしたよ。こわいよ」

翼が坂本に抱きついてきた。辺りは真っ白だ。何も見えない。しばらくすると煙が立ち消え、落武者の宮本の横には、同じようなざんばら髪の落武者が立っていた。

「みやもとーお。久しぶりだなーあ。今度こそ、決着をつけるでござーる。長い間、石だったので、言葉も長くなってしまおうでござーる」

そこには、あの佐々木がまたしても長刀を正眼に構えて、宮本の前に立っていた。

「あちゃー」

坂本のやや曲がり掛けた腰が驚いてまっすぐに伸びた。

「また、二人の心を洗濯しなくっちゃ」